

浮世絵の美人

その十六

詩人・専門学校西日本アカデミー校長

浮世絵の考案者とされる鈴木春信について、今少し述べてみたい。

美人画を得意とした春信の枕絵は、優雅で必ずしも国芳や歌麿のように色っぽくはないが、可憐な少女らしさが匂って捨てがたい魅力がある。

何となく生娘らしさが残っている。しかしだからと言って全くの娘というのではなく、その細ぶりの肢体に、かくれた色気があるのを好む粋人もいたのであろう。彼の浮世絵には後世に残る佳作が多いのも、その証拠である。

「今様妻鑑」から、更に少し紹介してみよう。春信の描く女のモデルがお仙という茶屋の娘であった事が資料に残っている。

枕絵の女の顔が、殆ど同じなのは、そのせいと思われるが、それ程の美人とも思えない。

いし、どちらかと言えば表情に乏しく、人形のような感じがして、私はあまり好きではない。しかし前述のよつに可憐と言えは言えるので愛好者も多い。

次の漢詩にそえて野の草むらでの男女の出会いが描かれている。

暁の露に鹿鳴いて
花始めて発ひらく
百般もろもろ攀たづぢる
一時の情。

明け方の露をふみわけて、鹿が鳴いて、秋の花がはじめて開いている。私は何度もへりかえし、興にまかせて、この花の枝を折りとったのである(男女交情を言っている)。

夜明けの説明があるのも少しおかしいが、絵を見るかぎり昼間の風景となっている。秋の野遊びに行き、ゴザを敷いて、酒や弁当を楽しんだ

各務章

のたろつ。一人の男が、寝ころがってひと眠りしている。その隣で、男女が交合を始めている。一方では向こうの草むらで別の男女が、これも愛のちぎりを結んでいる。

へいこうじゃないか、あそこへ見えそうじゃ」
右のような会話が書きつけ

てある。のんびりした風景と、男女の野遊びのありようが面白い。石でかこんだナベに火が燃えていて、弁当箱が重ねた萩やススキの野草。こんな

春画も、気分を和ませて、当時の茶人にも好まれたのではないだろうか。

春信の絵には、菊の花や松の木等、周囲の草花等を描いている。

さて、次にもう一人の絵師をあけて、枕絵の多様さについてみよう。

柳川重信。北斎の高弟の一人とされている。北斎の長女と結婚、一男に恵まれたが、離婚する。実家に戻った母子を北斎は世話したが、その子が長じて北斎に金銭的にも、精神的にも大変苦勞をかけたと言われている。

重信は、弟子の中でも秀れた技量の持ち主で、浮世絵師の中でも上位一、二番にあげられたと伝えられている。しかし四十七歳で死亡。惜しまれた絵師である。

彼の「五ッ雁金」の春本について述べてみよう。

序文の一節に「……色に逢う夜の五ッ雁金、新し手を出して……」とある。新手法と言っただけあって、絵も念入りに書き、彫りも刷りも共に仕上げが立派で最高の豪華本になっている。



日本料理 くら網 大丸よこ 731-2480

